

氏 名	茅 野 良 男 かや の よし お
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	論 文 博 第 111 号
学位授与の日付	昭 和 52 年 1 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	ドイツ観念論の研究 ——絶対知の形成と成立——

論文調査委員 (主 査) 教授 辻村公一 教授 酒井 修 教授 武藤一雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文（昭和50年3月30日，東京，創文社発行，A 5 版 360 頁）の標題について。

本論文は「ドイツ観念論の研究」と題されているが，それには「絶対知の形成と成立」という副題が附せられている。副題は本論文の研究範囲と研究方法とを限定的に明示するものである。すなわち本論文における「ドイツ観念論の研究」は，ヘーゲルの「精神の現象学」（1807年）における「絶対知」の成立に到るまでの形成過程の歴史的解明を意図するものであって，ヘーゲルの哲学体系における「絶対知」の展開及び完成，ヘーゲルの「絶対的学」に対する批判という意義を有するフィヒテの中期及び後期の「知識学」（1801年，1804年，1810年，1812年，1813年），シェリングの「自由論」（1809年）以後の諸々の述作には立ち入らない。その意味で本論文は前期ドイツ観念論の研究であって，「後期観念論」の究明は，今後の課題として残されている。

本論文の構成について。本論文は八つの章から成り立っている。以下逐次に，各章の要点とその間の聯関とを述べる。

第一章「カントにおける人間の自由の問題——有限な理性とその自由——」は，カントの1760年代における人間の道徳の原理を「道徳的感情」に置く考えから出発して，「純粹理性批判」（1781年，1787年），「実践理性批判」（1788年）等の批判期の諸著作における「自由の概念」を，「有限な理性的存在」というカントの基本的人間観にもとづいて「規定されて，規定する」（bestimmt-bestimmend）自由と考え，この二重性をもとにして，「理論理性」と「実践理性」，「感性」と広義における「理性」，「現象体」と「認知体」等のカント哲学における二元性の関係を解明し，最後にカントにおける「自由」の概念が「余りにも狭い」点と「余りにも高い」点とを批判し，同時に現代におけるその「自由」の概念の可能なる有り方を述べる。然るに，前記のようなカントの「自由」の概念は，「理論理性」と「実践理性」との一層根源的な統一を求めて，フィヒテの初期の「知識学」を台頭せしめる。

第二章「初期フィヒテの知識学と自我の問題——絶対的自我と理念としての自我——」の主眼とせる点

は、「全知識学の基礎」(1794年)から「知識学への第二序論」(1797年)前後に到る初期フィヒテの「知識学」の根本をなす「絶対的自我」乃至「純粹自我」が Richard Kroner や Heinz Heimsoeth のように「神」乃至「神性」と解釈され得ないことを示すとともに、それが「有限な理性的存在」としての人間の本質に他ならないことを解明し、更に進んで前記「第二序論」中でいわれている「純粹自我」と「理念としての自我」とを、夫々「有限な理性的存在としての人間の“未だ実質と実現とを欠く”純粹な形式」と「その理性的存在が理性を世界において完全に実現した場合の理念」として解釈することに、存する。この「理念としての自我」は、無限に接近可能な努力の目標ではあるが、到達不可能である。ここにおいて当然、このような「無限な努力」を惹き起こす究極的根拠が「絶対者」として1801年以降の「知識学」において問われてくる。その点に、端的に「絶対者」の直観から出立するシェリングの「同一哲学の体系」(1801年)への接近と対決との箇所が認められる。

第三章「シェリング初期の思索とドイツ観念論の展開——所謂“ドイツ観念論最古の体系計画”の解釈——」は、本論文の他の諸章とは異なり、文献学的考証という性格の濃いものである。「ドイツ観念論最古の体系計画」は、Franz Rosenzweig によって、そのように命名され、1917年に公表された断片である。それはヘーゲルの手記として残されたものであるが、その真の作者については、この断片の発表以来、多くの研究者によって種々の見解が提出されており、今日に到るまで決着をみない。本論文の著者は、シェリング、ヘルダーリン、ヘーゲル、ニートハンマー、ジンクレアー等の交友関係を精査し、結論においては、Franz Rosenzweig, Otto Braun, Horst Fuhrmans, Hermann Zeltner, Karl Jaspers, Walter Schulz, Dieter Henrich 等の諸家と同様に、この「体系計画」の作者をシェリングと見なし、ここに編入する。(なお、この作者問題研究の現状は、本論文第五章四においても報告されており、そこでも著者は、作者をシェリングとする見解を維持している。)この作者問題については最近、Otto Pöggeler のような有力なヘーゲル研究者が、作者をヘーゲルとするのが「一番確からしい」と主張している。しかし当時のヘーゲルに、このような「体系計画」を一気呵成に書くだけの能力があったか否かに、なお疑問が残る以上、著者のように作者をシェリングとする説もなお十分に維持され得るであろう。要するに、作者が誰であれ、この「体系計画」は、初期ドイツ観念論の形成過程においてフィヒテの立場からシェリング・ヘーゲルの立場への移行を示すものとして、重要な意義をもっている。

第四章「ヘーゲルにおける“精神現象学”以前の問題——1800年体系断片の背景とその射程——」は、Hermann Nohl によって「1800年体系断片」と名づけられたヘーゲルの手稿を、「無限な生への昂揚」乃至「無限な生との合一」を主眼とする宗教論であって、哲学ではないと見なしている。他方同じ年に着手された「キリスト教の実定性」の序論改作においては、「人間本性」にもとづく「宗教性」と「宗教の実定性」とは互いに否定し合う関係にあるとされている。ここにおいて、この相互に否定し合う矛盾関係を解決するために、両者の矛盾的対立の根本にまで遡源して、それを究明する思索が必要とされてくる。かくして「有限な生の無限な生への昂揚」という「宗教的生」は、それだけに留まり得ずして、「有限なものとの無限なものへの関係の形而上学的考察」に転化し、「生とは結合と非結合との結合である」と定式化されていた関係は、精神としての絶対者の自己展開の論理に転成する射程を含んでいると解釈される。要するに、本章は、ヘーゲルにおける宗教研究から哲学への転進の内的必然性を追究せんとした箇所であ

る。

第五章「イエーナ時代のヘーゲルに関する一考察——“フィヒテの哲学体系とシェリングの哲学体系との差別”をめぐる——」は、ヘーゲルが哲学へ転進した時期の最初の重要な論文である所謂“Differenzschrift”について「絶対知」の形成過程の一段階を明らかにせんとしたものである。この時期（1801年）においてはフィヒテの「自我哲学」もシェリングの「自然哲学」も一応の完成に達していた。ヘーゲル自身の特色づけに従うならば、前者は「主観的な（主観—客観）」の立場に成立するものであり、後者は「客観的な（主観—客観）」の立場に立つものである。ここにおいてヘーゲルは差当っては、シェリングの「同一哲学の体系」における「絶対的理性」の立場に立ちつつ、「自我」も「自然」も「絶対的で自己自身を直観する理性の最高の現象である」と考える。それ故、カントとフィヒテとのいう「理性」が「有限な理性」であったのに対して、シェリングとヘーゲルとのいう「理性」は「絶対的理性」である。しかしヘーゲルは「哲学的思索の道具としての反省」を重視する点では、シェリングとは異なり、フィヒテに同ずるところが認められる。しかしヘーゲルのいう「哲学的反省」は、悟性のなす分別としての反省にもはや留まるものではなく、それを通して働く理性の「思弁」（Spekulation）である。「絶対者と諸々の制限態の全体との分裂」（Entzweiung）、「理性と感性、知性と自然、絶対的主観性と絶対的客観性との対立」、更には「絶対者と人間との分裂」こそ、思弁としての哲学を欲求する源泉であり、哲学はこれらの「分裂」を絶対者の現象として認めつつ「統体性」を再興することに他ならない。以上の点から見て、この“Differenzschrift”は既に「一つの体系」を企図するものではあるが、その立場たる「絶対的理性」には「まだ歴史性が欠けている」と著者は指摘する。その指摘は次の二つの章における歴史の問題をヘーゲルについて考察することを著者に要求してくる。

第六章「ヘーゲルの哲学史と歴史哲学」は、イエーナ後期すなわち 1805/1806 年に始められたヘーゲルの「哲学史講義」と世界史の発展を背景にもつ「精神の現象学」（1807年）との内的連関を指摘することを意図している。然るに、ヘーゲルのこの最初の「哲学史講義」は完全な形では伝えられていないが故に、著者は Karl Rosenkranz の「ヘーゲル伝」（1844年）やその他の資料によって、前者の欠を補い、この「哲学史講義」においてヘーゲルが既に「絶対知」や「弁証法」や「絶対的精神」という彼固有の哲学の立場と方法とに到達していることを論定し、それが「精神の現象学」の終結において語られている立場と同一であることを示している。更に進んで、前記の「哲学史講義」と同時に講義された「イエーナの実在哲学」の末尾において「世界史」について初めて考察がなされていることを確定した上で、「哲学、世界史、哲学史の内的連関」の究明に向う。その結論だけを述べて置くならば、「哲学」の内容は「理念」（Idee）であり、時間や現実存在による限定や特殊化を蒙らぬ領域である。それに対して「哲学史」は「時間の中で」生起する「理念の展開の体系」である。更に「時間の中に」落ちた「理念」が、その他在たる「自然」を通過し克服して、「精神」としてそれ自身を展開する——詳言すれば、「客観的精神」としてそれ自身を展開する——最終段階が「世界史」である。それ故「哲学史」は世界史の最も内的なものである。

第七章「ヘーゲルの歴史観」は、前章を補完するという意義をもつ。細部を省略して著者のいう「ヘーゲルの歴史観」の核心だけを取り出すならば、「“即且対自的な理念”から“理念の他在（自然）へ”、“理念の他在から自己へと還帰する理念”（精神）という、この“自己の内へと還帰する円環”としての

“哲学”における概念の運動それ自身、ヘーゲルにおける“歴史”の中核ではないか」と言われる。このような「自己の内へと還帰する円環」は当然その内に人間をも含む。すなわち「神は、それが自己自身を知る限りにおいてのみ神である。神の自知はさらに人間における神の自己意識であり、人間の神についての知である。この知は神における人間の自知へと進む」とヘーゲルは言う。このように理解された「ヘーゲルの歴史観」に対して著者は「しかし人間を在りのままに見るとき、このような人間の絶対性、哲学の絶対的自己完結性・歴史の現在における終末性という主張が成立するであろうか」と批判的疑義を述べている。

第八章「絶対知と絶対的なもの——フィヒテとイエーナ時代のシェリングとの裂目——」は、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルにおける「絶対知」と「絶対者」との関係の相異を論究し、本論文を総括するという意義をもつものである。ヘーゲルは、シェリングの「哲学体系に基づく叙述の続き」(1802年)を読み、そこで「絶対知」という表現を知ったと言われる。それ故、著者はまず1800年—1801年におけるフィヒテとシェリングとの往復書簡——それは論争であるが——から、この問題に対する両者の見解の相異を明らかにすることを試みる。その相異の要点は、フィヒテにとっては「絶対的なもの」は、自我、意識、知の側から出発して、その根拠たるXとして終極に到達されるべきものとされるのに反して、シェリングにとっては、「絶対的なもの」は思惟する者の「捨象」乃至「脱自」において一挙に到達され、そこから実在的世界と観念的世界とが「量的差異」に従って導出される「最初のもの」・出発点であるとされる。更にまたフィヒテにとっては「絶対的なもの」は「活動」であるのに対して、シェリングにとっては「絶対的なもの」は「絶対的な静止」としての「最も純粋な存在」である。従ってまたフィヒテにとっては、「絶対知」は「絶対的なもの」ではなくして、その「表出」(Äusserung)に留まり、両者の間に断絶が認められるのに対して、シェリングにとっては「絶対的なものと絶対的なものの知とは一である可能性」が認められる。簡約して言えば、フィヒテにとっては「絶対的なもの」(神)と「絶対知」とは、彼の最後の「知識学」に到るまで、後者は前者の「像」乃至「図式」として一にならないのに対して、シェリングにとっては「絶対知があって、その外に更に絶対的なものがあるのではなく、両者は一である」と言われる。しかし、フィヒテやシェリングのいう「絶対知」には「世界史」の媒介が欠如しているのに対して、ヘーゲルのそれは世界史の考察に媒介されているという大きな相異が注目されねばならない。しかし「ヘーゲルにおいても“絶対的なもの”が知られうるということは自明のこととして無媒介に前提され主張されている」と著者は批判的な結論を下している。

論文審査の結果の要旨

ドイツ観念論の哲学についての研究は、1950年代の中葉より現在に到るまで甚だ多数に上っているが、それらの研究書は殆どすべて個々の哲学者の思想についての極めて綿密なモノグラフィーである。それに反して、ドイツ観念論の哲学全体についての歴史的論述は、19世紀におけるヨーハン・エドゥアルト・エルトマンやクノー・フィッシャーの近世哲学史の内における叙述及び1920年代におけるリヒャルト・クローナーの「カントからヘーゲルへ」、ニコライ・ハルトマンの「ドイツ観念論の哲学」以後現在に到るまで、現われていない。(最近ボルノウとローディとによって編集され公刊されたヘルマン・ノールの講義

遺稿「ドイツ運動——1770年～1830年——」は、この時期についての優れた精神的な研究であるが、個々の哲学に関する言及は乏しい。) 要するに、第二次世界戦争後に着手されたフィヒテ、ヘーゲル、シェリングの「歴史的—批判的全集」(いずれも未完)と多くのモノグラフィーとを考慮して企てられるべきドイツ観念論の哲学の全体的究明は、なお近い将来には、おそらく期待されえないであろう。

このような研究状況の内において、本論文の著者が18年の歳月をかけ、本邦において入手し得る限りでの新旧の資料を駆使して、「カントにおける人間の自由の問題」から「初期フィヒテの知識学」「シェリング初期の思索」を経てヘーゲルの「精神の現象学」における「絶対知」の成立に到るまでのドイツ観念論前半の形成過程を歴史的に究明せんとした努力は、高く評価されねばならない。何故ならば、もともと毀誉褒貶の甚しいドイツ観念論の哲学に対しては、批判的対決や自分の哲学的立場よりなされる解釈に先立って、事実の地道な歴史的研究が特に要求されるからであり、そのような研究がまた本邦においてはなお欠けているからである。

次に本論文の優れた点を列挙する。

1°. 着眼点の的確性。ドイツ観念論の研究全体の着手点を「カントにおける人間の自由の問題」に置くことは、殆んど定説と見なされ得るにしても、研究全体を見通すのに極めて適切な見解である。何故ならば、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルの思索を一貫する根本問題の少なくとも一つは、「人間の自由」の徹底的究明ということに存しており、それを抜きにしては、彼等の思索における「絶対者」も「絶対知」もその成立と理解との地盤を失うからである。更に本論文において論究されている4人の哲学者についても、夫々の抱懐していた基本的「人間観」が簡明に取り出され、それとの連関において各々の学説の特色が解明されていることにも、長年の研究によって養われた確かな着眼点が看取される。

2°. 該博な知識。本論文は、そのうちで取り扱われている4人の大きな哲学者のテキスト及び書簡はもとより、論文の各章の執筆の時点において入手し得る限りでの文献の殆どすべてを精査した上で、書かれたものであり、著者の知識の該博さには驚嘆すべきものがある。この点は、特に第三章「シェリング初期の思索とドイツ観念論の展開——所謂“ドイツ観念論最古の体系計画”の解釈——」に著しく現われている。この「体系計画」の作者問題は今なお論争の渦中にあるが、著者の見解もドイツで発表されるならば、大きな注目を惹くことであろう。

3°. 各章の独立性と内的連関。本論文の各章は、夫々相異なった時点において書かれたものであり、従って夫々独立した完結性をもっている。しかし、ドイツ観念論についての諸論文の単なる集成と見なされるべきものではなく、「論文内容の要旨」において指摘されたように、先行の章と後続の章との間には問題史的な内的連関が明らかに認められる。その意味において本論文は、その副題の示す通り、一貫した歴史的研究という性格をもっている。このような性格は、ドイツ観念論の哲学全体についての著者の一定の粘り強い関心の持続ということからしか理解できない。

4°. 批判性。本論文は、前項に述べられたように、歴史的研究が主要内容となっているが、第一章におけるカントの自由論、第六章及び第七章におけるヘーゲルの歴史観、第八章におけるフィヒテとシェリングとの「絶対者」についての思想等に関しては、夫々著者自身の立場から穏健にして中正な批判が述べられている。それは、本論文が著者にとって「実存としての人間の自己把握の成立の探究と、その源泉へ

遡ろうとする企図」に導かれた歴史的研究であることに、由来するものと理解せられ得る。

しかしながら、本論文には、なお解明を要すると思われる若干の問題点が残されている。次にそれを列挙する。

5°. カント哲学の解釈については、a) 理論理性に対する「実践理性の優位」の解明が問題として残されている。b) そのことと連関して「超越論的統覚」と「超越論的自由」との関係の究明が更に要求される。c) 更に「実践的自由」の問題をめぐって道德と宗教との関係、カントにおける神観の変動の有・無が追究されねばならない。

6°. シェリングの哲学については、初期フィヒテの「自我哲学」、ヘーゲルの「精神哲学」に対してシェリングの特色をなす「自然哲学」が——それについての著者の所見は諸処に散見されるが——特に一章を設けて主題的に論究されることが望ましい。

7°. ヘーゲル哲学の形成の解釈については、a) 「1800年の体系断片」の資料としての軽重が更に検討を要すると思われる。b) 「絶対知」と「思弁的弁証法」との成立の歴史的理解のためには、「哲学批評雑誌」に発表されたヘーゲルの諸論文、特に「哲学に対するスケプティチスムスの関係」(1802年)、「信と知」(1802年)の二論文の考察が必要である。

以上の問題点のうち6°と7°とは口述試問の際、著者から明確な見解が披瀝されたが、5°は、三つの批判書として遺されたカント哲学の全体像を如何に把握すべきかという難問題に導くものであり、見方によっては、本論文の研究範囲外に属し、それ自身一箇の独立した研究の主題とされるべきものとも考えられる。

本論文には上述の問題点が残されているとはいえ、全体として見られるならば、本論文の高い水準と精到な研究成果とが本邦におけるドイツ観念論の研究に貢献するところ甚だ大なるものがあることは、疑いの余地がない。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。